

愛着の問題のある子どもと発達障がいとの鑑別の検討

稲垣 卓司*・藤川 雅人*・山口穂菜美*・原 広治**

Takuji INAGAKI · Masahito FUJIKAWA · Honami YAMAGUCHI · Hiroji HARA
Behavioral Differentiation between the Children
with Attachment Related Problem and the Children with Neuro-developmental Problem

ABSTRACT

〔目的〕子どもの問題行動が「愛着の問題によるものか？発達障がいによるものか？」の鑑別に困ることがある。支援者が見極めて適切な言葉かけや関わりをすることが重要である。本研究は、鑑別点を明らかにして子育てや支援に役立つように現状を検討することである。〔方法〕児童養護施設のスタッフ6名に半構造化面接をおこない質的研究をおこない、カテゴリー、サブカテゴリー化した。〔結果〕陳述記録は280あり、上位のカテゴリーとしては『愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴』、『両者の鑑別点』、『実際の対応』、『スタッフの想い』の4つが抽出された。〔考察〕言動の鑑別に役立つものとしては、愛着では「愛情欲求」、「アピール行動」、「試し行動」、「意図的な言動」、「成育歴」などが、発達障がいでは「独特な対人関係」、「見通しが持てない」、「勉強が難しい」、「感覚過敏」、「パニックの状況」などが鑑別に有用の可能性が示唆された。「衝動コントロール」、「ルールが守れない」は両者に認められ鑑別が難しいと思われた。これらの子どもたちを支援するために、特性をよく知って関わる必要がある。

【キーワード：愛着障がい、発達障がい、特別支援教育、児童養護施設】

1. 研究の背景と目的

子どもの教育や支援の現場では、子どもの問題行動が「愛着（アタッチメント）の問題によるものか？それとも発達障がいの特性によるものか？」という鑑別に困ることがある。同じ問題行動に見えてもそれぞれの対応の仕方は異なり、支援者が正確に見極めて適切な言葉かけや関わりをすることが重要である。たとえば、問題行動を起こした子どもに注意をする場合、強く言うと不機嫌になって聞き入れなくなり大暴れしたり、逆に固まってしまうことがある。このように、支援が子どもの実態に合わず、状態が悪化するケースも少なくない。支援する側がある程度の鑑別の視点をもって接することは、支援や指導内容を決定づける重要なことであるにもかかわらず、この問題に対する具体的な知見が少ない。保育園・幼稚園・学校現場や児童施設などでは、今までの経験をもとに試行錯誤しながら対応しているのが現状と思われる。

発達障がいのみで経過する子ども、愛着に問題を抱えたまま経過する子ども、両者が混在して経過する子どもが考えられる（図1）。発達障がいは生まれつきもっている特性の問題（先天的な脳機能障がい）であり、小中学校の通常学級で8.8%に学習面・行動面で困難さのある児童・生徒がいると報告されている（2022年文部科学省）。一方、愛着障がいは関係性の障がいで、後天的に子どもと関わる特定の人との「関係性」の障がいとされる¹⁾（愛着障がいの頻度は不明）。発達障がいの子ども

もが環境や周囲との関係性の中で愛着に問題を抱える場合は、特性が重なると鑑別は難しくなるであろう。

本研究の目的は、愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴や両者の鑑別点を明らかにして、保育園・幼稚園・学校や子育て支援施設でより有効に対応できるように実態を検討することである。

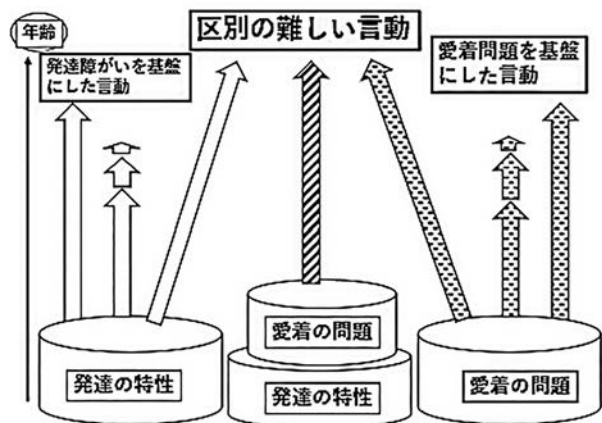


図1 発達障がいと愛着の問題から生じる言動

* 島根大学教育学部特別支援教育専攻

** 島根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻

愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の両者が合併している事例も多くあると思われるが、本研究では、まず両者の特性の違いを押さえておきたい(図1の左右の両極の特徴)。そして実際の教育・子育て・支援の場で鑑別の視点からみて、どのような言動の判断や支援が難しいのかを明らかにし、その課題の検討をおこなう。

本稿では家庭で様々な事情のある子どもたちが入所している養護施設の支援員・指導員に対面で聞き取り調査をし、どのような現状で課題があり、どのような工夫をしているかを中心に検討したい。

2. 研究の方法

(1) 分析対象

A県内の児童養護施設・心理療育施設3か所を無作為に抽出(幼児から高校生までが10-20名程度在籍)。それぞれ2名のスタッフ、合計6名(児童指導員5名、心理療育担当員1名)に、事前に作成したインタビューガイドで半構造化面接をおこなった。愛着に問題のある子どもと発達障害の子どもの言動の特徴にはどのようなものがあるか、鑑別ができるのかどうか、どのような点が課題なのかを中心に聞き取りをした(大筋の質問項目はあらかじめ決まっているが、対象者には質問から大きく外れない程度で自由に発言してもらった)。そして調査結果の質的検討をおこなった。調査期間は令和5年3月1日から3月31日。

(2) データ収集

聞き取り調査は書面での同意を得てICレコーダーで録音。個人情報特定できないように匿名性に十分配慮した。録音した陳述データを文字起こし、エクセル表(マイクロソフト社)で逐語録を作成した。それを熟読して、布施他²⁾を参考に最小の分析単位である発言例に切断しコードを抽出した。さらに、記入した表でデータの内容の共通性や類似性を手掛かりに分類し、次に、共通の概念に属するラベルを統合し、グループを構成してカテゴリーに名前を付けた。大・中カテゴリーを想定して並び替え配置した。カテゴリーの下位にサブカテゴリーを置いた。以下発言例は“ ”で示し、コードは「」、サブカテゴリーは[]、カテゴリーは< >、上位のカテゴリーを『 』で囲む形で表記する。最後に各カテゴリー内の項目名の関係を検討し、カテゴリー、サブカテゴリーを用いて空間配置図を作成し、複数の項目をまとめて命名した。

本研究は島根大学教育学部研究倫理委員会の承認を得た(R310)。

3. 結果

6人の対象者は男性3名、女性3名で平均年齢30.5歳。施設勤務歴平均8.0年である。インタビューの平均時間は43分であった。対象者6名からの陳述記録は280の発言が得られた。上位のカテゴリーは『愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴』(81発言)、『両者

の具体的な鑑別点』(88発言)、『実際の対応』(43発言)、『スタッフの想い』(68発言)の4つの内容に分けられた。カテゴリーは具体的な内容を表すカテゴリーが8件、具体的な内容を表すサブカテゴリーが22件、コードは43件抽出された。

1) 『愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴』：2つのカテゴリー(表1)

<愛着の問題による言動の特徴>と<発達障がいによる言動の特徴>のカテゴリーに分けられた。

<愛着の問題による言動の特徴>では、サブカテゴリーが[対人関係で生じる特徴]、[問題行動・特性]、[情緒不安定]であり、中でも「愛情欲求」(“何かを訴えたり、そばにいと落ち着く子”など)、「アピール行動」(“注意されると「死んでやる」と言ったりする”等)、「意地悪」(“自分は嫌なことは訴えるが、人に嫌なことはやめれない”等)、「試し行動」(“どこまでかなえてもらえるか見ている”等)が特徴と考えられた。

<発達障がいによる言動の特徴>では、サブカテゴリーが[問題行動・特性]、[学習の課題]、[発達障がいへの対応面から]であり、特にコードの「独特な対人関係」(“セリフをコピーのように覚えている”等)、「興奮しやすい」、「感覚過敏」(“大きな音、暗闇を怖がる”等)などが特徴として抽出された。

2) 『両者の鑑別点』：2つのカテゴリー(表2)

<鑑別に有用な特徴>と<鑑別が難しい特徴>のカテゴリーに分けられた。

<鑑別に有用な特徴>では、サブカテゴリーが[言語面の特性から]、[家庭状況から]、[医療介入]であり、その中で「意図的な言動」(“うそや盗み、暴力的な行動は愛着を疑う”等)、「親への愛情欲求」(“自分だけ外泊できないと、いらいらして物にあたる”等)、「成育歴」などは愛着問題からの障がいの特徴として抽出された。

<鑑別が難しい特徴>では、サブカテゴリーが[集団の中の言動]、[スタッフとの関わり]、[鑑別不能な両障がい]であった。[集団内での言動]では「気持ちの表現が苦手」、「衝動性・コントロール」(“クールダウン部屋に行っても解決しない”等)、「ルールが守れない」があり、[スタッフとの関わり]では「気分変動・不安定な言動」(“スイッチが入っている時は何を言っているか分からない”等)、「試し行動」(“愛着・発達関係なく、この職員はどのくらい怒るか見ている等)、「優位性保持」(“男の先生のいうことはきくが女の先生のいうことはきかない”等)などが鑑別の難しい点として挙げられた。[鑑別不能な両障がい]では「両方の特徴がある」(“完全に切り離せない” “二つの障害は似ている”等)のコードには最も多くの発言数が上がった(14発言)。

3) 『実際の対応』：1つのカテゴリー(表3)

<具体的対応方法>がカテゴリーとして挙げられた。

表1 『愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴』：2つのカテゴリー
()の数字は発言数、発言例は一部記載

上位カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	発言例
愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴	愛着障がいの特徴	対人関係で生じる特徴	トラブル(7)	・コミュニケーション苦手で、トラブルが起きやすいうまくいかない。 ・集団生活でトラブルメーカー。周囲の子から苦情・文句が出る。 ・同じトラブルを起こす。
			愛情欲求(12)	・自分からいろいろ訴えてくる子は愛情が不足していると思う。 ・何かを訴えてきたり、そばにいと落ち着く子は愛情が不足しているのが分かりやすい。 ・寂しいという想いからの行動、見てほしいとかの行動から出ていると思う。
			アピール行動(8)	・みてみてという感じが強い。スタッフに見てほしい。 ・泣きまねをする。 ・いけないところを注意されると、「死んでやる」と言ったり、パニックを起こして騒ぐ。
		問題行動・特性	意地悪(11)	・自分が嫌だと思ったことはすぐ訴えるが、人に嫌なことをすることはやめられない。 ・人から嫌だったことを告げ口みたいに言いに来る。 ・年下の子をいじめ。止めると、「遊んでいるだけだよ」と言ったりして、いうこと聞かない。
			試し行動(12)	・「私のこと嫌いだからそう言っている」「本当は私のことをどうでもいいと思っているんでしょ」という。 ・スタッフがどこまでやったら怒ってくるんだらうと試す。 ・職員の前で、気を引くために、髪の毛抜くとか、刃物を出してリスカしたりする。 ・無理な要求をしてくる。どこまでか耐えてもらえるのかをみているよう。
			感情不安定	感情コントロール(9)
			不安(4)	・騒ぎながらも人に見られることを気にする。部屋に窓があると外から見られることを気にする。 ・実親と会う時には逆にがちがちに硬くなってしまふ。怖くてなのか、親に気持ちを出せないんだと思う。 ・見捨てられるんじゃないかと言う不安から問題行動を起こし、見捨てられないためにいい子になる。
	発達障がいの特徴	問題行動・特性	対人関係の特徴(3)	・発達障害は相手誰でも同じ反応が多いし、相手の違いで変わらなければ発達障害の側面が強いのかも。
			(独特な対人関係)	・話をしたことを忘れていたり、そのまま言ったセリフをコピーのように覚えている
			興奮しやすい(3)	・発達障害は、自分で想定していた予定が崩されることにポイント。 ・発達にはパニック的な自傷
			見通しが持てない(2)	・発達障害は見通しを満たして支援するとよい。課題を明確にしてあげるとよい。
			感覚過敏(2)	・大きな音、暗闇を怖がる。大きな音や暗闇は虐待の愛着によるものかと思うこともある。 ・服装で半袖がいい、生地がいい、この味がよいというのは発達障害かな。
学習の課題		勉強が難しい(3)	・発達障害は自学が苦手。計算ドリル、分かりやすい説明、見通しを持って説明が大切。	
	発達障がいへの対応面から	有効な対応(5)	・発達障害の子はロールプレイや型が入りやすい。 ・発達障害なら、特性上の生きづらさで分かっている	

<具体的対応方法>では、サブカテゴリーに[子どもへの対応]、[職員間の対応]、[対応の課題]があり、「受容的な対応」（「褒めて伸ばす」「あなたのことを見捨てない」関わり）等）、「臨機応変な対応」（「どの対応が合っているかその都度対応」等）をおこない、職員間で「情報共有」、「対応の統一」をすることの重要性が抽出された。

<スタッフの悩み>では、[対応の難しさ]（「父母を求める態度に切なくなる」「お試し行動はすごく困る」等）、[精神的な負担感]（「保護者にも苦しみがある」「子どもの問いかけにベストな返答の仕方に悩む」等）が抽出された。

4) 『スタッフの想い』：3つのカテゴリー（表4）

『スタッフの想い』は元々の鑑別点を探るという本研究目的とは離れるが、スタッフの日頃の悩みや課題、子どもたちへの想いが多く語られたため（68発言数（全体の30%）、1つの大カテゴリーとして挙げた。カテゴリーとして<保護者への期待>と<学校への期待>と<スタッフの悩み>の3つに集約された。

<保護者への期待>では、サブカテゴリーとして[約束ごと]（「できるか分からない約束はやめてほしい」等）、[親としての役割]では「親に見放される不安」や「親としての責任」（「（施設のルール）があるのに親が変えてしまう」「親も課題がある」「親の治療も大事」等）で13の発言があり、発言数が2番目に多かった。

<学校への期待>では、[学校側の理解][学校との連携]、

表2 『両者の鑑別点』：2つのカテゴリー

上位カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	発言例		
両者の鑑別点	鑑別に有用な特徴	言動面の特性から	意図的な言動(8)	・愛着は思っていないことを言っているなど分かる。試し行動で言っているなど思うことがある。 ・愛着はそれをしてみてもらわないといけない感じ。ポイントかな。 ・うそや盗み、暴力的な行動では愛着を疑う ・愛着障害は一回満たしてあげたらよいという感じではない。継続的なものを求めている。		
			パニックの状況(1)	・パニックでどこまでも行く場合は発達、後で来てくれるかなとか確認しながらうろうろしていると愛着。		
			身体接触(1)	・身体接触、ハグ、タッチをしたいだろうけど、なんかためらっている感じがある。愛着障害っぽい。		
			家庭状況から	親への愛情欲求(3)	・母の愛情を求めているのがすぐ分かる。 ・自分だけ外泊できないと、気持ちを言葉にできなくて、いらいらしてしまう。ものにあたり泣きわめく。	
				成育歴(7)	・成育歴、生い立ちをみると分かる。資料から愛着障害を持っていることを察することができる。 ・発達の子は家でフォローされていない期間が長く二次障害的に愛着の状態でごじれてしまう。	
				医療介入	診断確定例(3)	
		鑑別が難しい特徴		集団中での言動	対人関係のつまずき(11)	・集団のルールを守るよう指導しても通じないことがある ・同じ障害があっても人間関係のつくり方は異なる。うまく人間関係を構築できない子も多い。 ・人の目が一杯あるところは苦手と動きづらくなる。 ・遊びたいけど遊び方が分からないからいやがるちょっとかいて逆になんか嫌がられる。
					気持ちの表現が苦手(3)	・気持ちの表現では差はあまり感じない。
					衝動性・コントロール(5)	・クールダウン部屋に行ったからといって解決しない。 ・一番対応が難しいのは発達か愛着かの診断がつかないグレーの児童がいて、言動が激しい。 ・激しい言動では暴言がある。ものに当たり、暴言を吐く。いらいらしてもものに当たる。
					ルールが守れない(2)	・日課やルールに対して、子どもがひっかかって沿わないことが日常茶飯事。
				スタッフとの関わり	気分変動・不安定な言動(11)	・スタッフが横にいて落ち着く子もいるが、それによって情緒が刺激されて逆に続くことがある子もある。 ・スイッチが入っている時は自分が何を言っているか分からないし、覚えていない。 ・後で反省をする子もいれば、覚えていない子もいる。
					試し行動(5)	・愛着・発達関係なく、この職員はどのくらい怒るのかどんな反応するのか、見ていると思う。 ・本来なら自分でできることでもこの先生ならやってくれるだろう。
					愛情欲求の言動(3)	・望ましくない行動の時に叱られることでそれを学習で覚えて愛情を求めて望ましくない行動が増える。 ・約束しておいて間に合わない「何で遅れた」と怒り許せない。厳しい。
					優位性保持(6)	・この職員の時にはこうするけど、違う職員の時には反論したり、職員によって言ってくるのが違う。 ・男の先生の言うことは聞く。女の先生の言うことは聞かない。
鑑別不能な両障がい	両方の特徴がある(14)				・完璧に切り離しては考えられない。 ・鑑別するのが難しいケースが多い。両方の特徴のあるケースがある。 ・状態像として、二つの障害は似ているところが多い。 ・自傷行為はどちらも区別なくある。	
				未診断(6)	・診断がつかないまま問題行動が大きくなって生活できなくなって入所している。 ・入所後診断名をつけてもらい治療もスタートするケースも多い	

表3 『実際の対応』：1つのカテゴリー

上位カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	発言例	
対応	具体的対応方法	子どもへの対応	受容的な対応(11)	・子どもは褒めて伸ばさないといいけない。 ・「あなたのこと見捨てないから」とフォローをする。 ・発達障害や愛着障害に限らず、この施設は安心安全なところということをは心がけている。 ・繰り返しの対話と、実際どうだったかの振り返りの積み重ねで本人の状況を生の中で探っていく。	
			臨機応変な対応(6)	・この子にはこの対応が合っているという感じで対応している。その都度対応。 ・褒める時は褒めるが、不適切な行動や危ない行動をした時には厳しくするというのも大事	
			職員間の対応	情報共有(10)	・その子の行動を職員同士で話し合う。同じ子どもの視点を持つことができる。 ・悩んでいても自分だけではなかったなと分かち合える。 ・いろんな人がその子に関わるので、連絡ミスがないようにしている。 ・その場で対応しても、その後の報告をして検証する場を持つようにしている。 ・最低限のルールは伝えておかないといけない、共有する。
				対応の統一(10)	・こちらのやり方、言動をみて真似するのでスタッフは模範にならないといけない。この先生に言えば通るとなるといいけない。 ・ルールを統一して関わるようにしている。どの先生の言うこともきくように基本的にルールは統一している。 ・園のルールを破るようなことはいけないので、最低そこは守らせようと思っている。
		対応の課題	環境づくり(6)		・子どもによって別室でプラスアルファの支援によって変わるので、その子にあった対応を考える。 ・刺激が多いのがいけないのがはっきりして環境を変えると落ち着く子もいる ・みんなで見ているよと言う雰囲気作り。

表4 『スタッフの想い』：3つのカテゴリ

上位カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード	発言例	
スタッフの想い	保護者への期待	約束ごと	守れない約束(6)	・保護者に対して、できるか分からない事を約束してしまうことはやめてほしい。 ・できないのに親ができると言われると子どもは期待して、そして裏切られて、不安定な言動に繋がることもある。親に一番しないでほしいこと。	
		親としての役割	親は愛する存在(3)	・子どもにとっての親は絶対的な存在。愛する存在。	
			親に見放される不安(3)	・いきなり連絡がなくなる家族がいると子どもは悲しんだり、泣いたり、怒ったりするので。	
			親としての責任(13)	・型が大切なのに、ルールを親が変えてしまう。 ・一番支援に困るのは、連絡が取れない場合。取れてもなかなか児童と接触させてあげられないとか。 ・親が変わり方を変えたら子どもも変わることがある。親も課題のある方がいる。 ・治療施設なので、子どもの治療が第一だと思うが、家族の治療もすごく大事と思う。	
			親へ愛情(5)	・大人に助けてほしい、近くにいてほしい、今こんな気持ちなんだよと分かると治療に良い ・愛情の注ぎ方が分からない。お寿司食べにいたり、買い物に行ったり。	
		褒める関わり(3)	・親に褒める関わりを増やしてほしい。 ・親には望ましくない行動はがみがみ言わずにもっと前向きな関わりを増やしてもらえるとありがたい。		
		学校への期待	学校側の理解	対応に満足していること(5)	・学校とは繋がっていると思う。高校は義務教育ではないので、やめる子もいる。 ・学校から訪問ある。連絡会がある。担当と担任で話し合う場がある
				望むこと(6)	・高校生で大変になるかな。学校に理解を求めてもらおうと思ってもなかなかうまくいかない。
			学校との連携	個別の相談(2)	・担任と授業の組み方等を話している。こういう内容だったら興味を持つかもとか話すようにしている。 ・個人面談に行く。トラブルの連絡があるとその日のうちにその子の振り返りができる。
			スタッフの悩み	対応の難しさ(9)	
	精神的な負担感(7)				
	家族への想い(5)	・親も自分も変わらないといけないと思う。 ・家族には自分の能力とか特性を分かってもらえると子どもとの関わりも違ってくると思う。			

5) 主要なカテゴリ・サブカテゴリ間の関連

上記のカテゴリとサブカテゴリとコードの関連を相関図(図2)に示した。

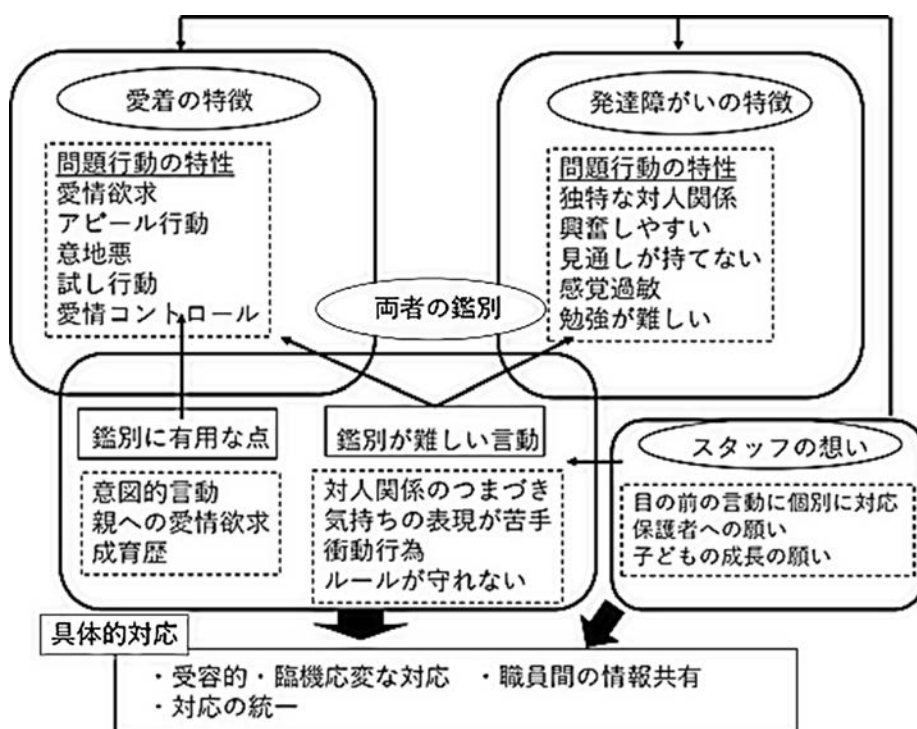


図2 主要なカテゴリ・サブカテゴリ間関連図

4. 考察

本研究では、児童養護施設と心理療育施設の3か所の子どもと直接かかわっている6名のスタッフにインタビュー調査をおこなった。事前に作成したインタビューガイドに沿って、愛着に問題のある子どもと発達障害の子どもの言動の特徴にはどのようなものがあるか、鑑別ができるのかどうか、どのような点が現場では課題なのかを中心に聞き取りをした。その結果、全部で280の発言数が整理でき、コード化、カテゴリー化することができた。上位のカテゴリーとして『愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴』、『両者の具体的な鑑別点』、『実際の対応』、『スタッフの想い』の4つに集約された。それぞれについて考察をしていく。

1) 愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の特徴について

近年、発達障がいの特性や対応方法などの理解が広まってきたと思われる。しかし、愛着に問題のある子どもの特性や対応方法については、まだ十分理解されているとは言えない。子どもの示す言動を、発達障がいを念頭に捉えるか、愛着（アタッチメント）の問題を中心に考えるかによって学習の支援の方法や学校生活指導、また社会的支援のあり方は大きく異なるため、慎重な評価が必要である³⁾。また診断する医師の立場では、子どもの問題行動を「能力の問題」として、「問題行動」即「発達障がい」と診断して、心理的問題に注目せず、臨床では両者が重なり合う場合も少なく³⁾、実際には愛着に基づく課題と発達障がいによるものとの区別は難しい問題といわれている⁴⁾。

図1に発達障がいによる言動と愛着の問題を基盤にした言動についての関係を模式的に示したが、発達障がいは生まれつきもっている特性の問題であり、愛着障がいは後天的な関係性の障がいである¹⁾。そして、もともと発達の特徴があり、その土台の上に環境によって（保護者との関係性など）愛着の問題を生じている子どもたちもいるであろう。両者の特性を持っているので、鑑別がより難しくなるのは想像に難くない。また、発達障がいや愛着の問題のみの子どもの中には両方の特性を呈する場合もあると考えられ、複雑になり教師は対応の際に区別がつきにくくなる。

本研究では、まず両極の特性を知り、鑑別しにくい言動の区別のヒントがないかと探っていった。その結果、＜愛着の問題による言動の特徴＞では「愛情欲求」、「アピール行動」、「意地悪」、「試し行動」などが分かりやすい特徴として、＜発達障がいによる言動の特徴＞では、「独特な対人関係」、「興奮しやすい」、「感覚過敏」などが抽出された。このような言動は両者の特徴の両極にある特徴として考えられた（図2）。

2) 両者の具体的な鑑別について

愛着の問題による言動と発達障がいによる言動の鑑別に役立つものは、「愛情欲求」、「アピール行動」、「試し行動」、「意図的な言動」、「親への愛情欲求」、「成育歴」

などが愛着の障がいの鑑別に（63/81発言数（77%））、発達障がいでは「独特な対人関係」、「見通しが持てない」、「学習の課題」、「感覚過敏」、「パニックの状況」で鑑別（18/81発言数（23%））ができることが示唆された。「対人関係のつまずき」や「気持ちの表現」が苦手なこと、「衝動コントロール」ができないこと、「ルールが守れない」ことは両障がいに認められ鑑別が難しいと思われた。

近藤⁴⁾は、自閉スペクトラム症児のアタッチメント形成には困難が伴い、何に困っているかだけでなく、アタッチメントに関する信号行動も分かりにくいことがあるため、愛着か発達かの区別は難しいと述べている。

実際に教育の現場では、発達障がいへの注目は高まり理解は広がっているが、多くの「気になる子ども」を発達障がいとしてとらえることで、不適切な発育等（愛着の問題）によって発達障がいによく似た症状をもつ子どもへの対応で、混乱が生じているとされる⁵⁾。

実際には簡単ではないかもしれないが、発達障がいとの鑑別や評価に関しては、養育歴を丁寧に聞き取ること、養育者からの聞き取りだけでなく養育者と子どもとの交流を分離再会場面を含めて直接的に観察すること、主たる養育者以外からも聞き取りをおこなうことなどが、配慮すべき点³⁾となるであろう。本調査でも親への愛情欲求の様子や成育歴などが愛着の問題の理解の参考になることが示されている（表2）。

3) 実際の対応について

本調査では対応のポイントとして、「受容的な対応」、「臨機応変な対応」をおこない、職員間で「情報共有」、「対応の統一」をすることの重要性が抽出された。

成長の過程で養育者とは異なる他者との関係においてアタッチメント（愛着）の質が変化する可能性があり、逆境的な環境で成育した子どもにおいても信頼できる大人との関係を通してアタッチメント・タイプが安定型に移行することが期待できる³⁾ため、関わる周囲の者が受容的で臨機応変な態度をとる必要がある。また、愛着の問題は将来の精神疾患の発症と関連することが指摘されており、精神疾患発症の予防の意味からも早期の適切な支援が求められる。

特に、子どもが虐待を受けて育った場合、様々な場面で、攻撃的、衝動的になり、不適応を起し、うつ病、不安障害などの二次的問題に繋がりと報告されている⁶⁾。教育現場でも虐待の問題は見逃せない問題である。このため、虐待の場合も含めて愛着の問題と、背景にあるかも知れない発達障がいの特徴を理解した上で、複数の関係の中でアタッチメントの形成を促せるように支援をすることが思春期を乗り越え、二次障害を防ぐことにつながるだろう⁷⁾。本研究でもいずれの施設でも、“子どもを見捨てない”、“「この施設は安全な場である」と伝えること”、“繰り返しの対話”の必要性、個に応じた対応など受容的な姿勢が一貫していた。

一方で、保護者と分離して養護施設などの安全な環境が与えられた後も、被虐待児は施設の職員とも非安定的

な関係を築きやすいという報告もある⁸⁾。被虐待児は、生活の中で子供が安心感を持つ支援を受けると、それまで頑なに抑圧していたさまざまな感情を表出する。新しい養育者の忍耐力を試すかのように執拗に不適切な行動を示す。回復に向かう過程ではあるが、子どもはそれに全エネルギーを傾注するため、養育者（支援スタッフ）を疲弊させてしまうとの報告がある⁶⁾。施設の支援スタッフはこのようなストレスを日々抱えていることも考えられる。子どもの成長に関わる大人の役割がとても大切になる。今回の調査対象のいずれの施設も、スタッフ間で情報共有をし、ルールを統一してスタッフ皆で“見ているよ”という環境を作ることに尽力されていた。

学校においても同様に教師の関わりが大切になる。教師が配慮して子どものニーズにこたえ安心を与えると、教師との関係性を悪化させるリスクを減らし、激しい行動も減らせる。教師が繊細に関わると子どもの激しい行動を減らすことができる。教師の配慮がこのような子どもたちの発達の助けになる。そして、安全な愛着形成のサイクルができていくと信頼関係が生まれる⁹⁾。また、大人のアタッチメント研究から、養育機能を家庭の中だけに求めるのではなく、より広い対人関係の中でとらえることにより逆境を生き抜くレジリエンスを育てる希望が見出されている¹⁰⁾。スタッフの発言にあったように“学校とは訪問や連絡で繋がっており”、子どもたちの生活の場である養護施設と学校が緊密に支える環境であるといえる。

いずれにしても、探索と安全基地行動の場は家庭の内から外へ移動し、新たな関係性の体験を伴いながら十年余の長い時間をかけて、子どもの心理社会的発達の様々な領域で変化が生じる¹¹⁾とされ、根気の必要な関わりになると思われた。

4) スタッフの想いについて

今回は対象が児童養護施設等であり、スタッフ自身も様々な想い（悩みや期待や願い）、鑑別の視点を抱いて子どもたちの成長を見守っている姿を理解することもできた。

[保護者への期待]の想いが33発言数で多く、“約束を守ってほしい”、“連絡を取ってほしい”、“保護者自身の学びの必要性を願う”気持ちが語られていた。また、[学校への期待]として、うまく連携を取っていききたい気持ちがあった。そして、スタッフの想いの中では「対応の難しさ」や「精神的な負担感」などが挙がっていた。特に「障害のある子どもを育てる保護者への理解のしにくさに息が詰まる」との発言は印象的であった。日々、子どもたちを見守られているご苦労がうかがえた。

そして、今回の調査では、対応するスタッフは実際には鑑別に力を入れるのではなく、今この子が何を訴え、何に困っているのかを考えて、その都度適切な対応ができるように関わり続けていることを改めて知ることができた。また、スタッフが愛情をもって、時に毅然とした態度で連携を取りながら根気よく支援すると、子どもに

も支援する者にも希望が生まれる。この点は施設スタッフの想いの中にも抽出されていた。

5) カテゴリー全体の関係性について

今回のカテゴリーとコードの相関図を図2に示した。愛着の特徴と発達障がいの特徴では分かりやすいものもあるが、鑑別の難しいものも多くある。

本調査結果からいくつかの愛着の特徴や発達障がいとの鑑別に役立つ言動を提示した。上記の結果や調査したスタッフの経験談から、発言数をもとに考え、学校現場で教師が参考になることのポイントを以下に示した。①「愛着の問題」として理解しやすく鑑別に有用なことに「意図的言動」、「親への愛情欲求」、「成育歴」がある。②「愛着の問題と発達障がいがか重なっている場合は見分けるのは難しい」ことを知っていること。③両者の特徴を知った上で、子どもを多面的にみるのが基本。④具体的対応の際に「受容的・臨機応変な対応」「職員間の情報共有」「対応の統一」をして支援すること。

愛着の問題のある子どもへの具体的に有効な手立てについては、今後の研究課題としたい。

5. 終わりに

本研究では、親のネグレクトや養育困難などを背景とする子どもの施設職員を対象に調査をおこなった。

しかし、愛着の問題を考えるとときには、これらの面だけではない。親の言動が子どもの成長を妨げる。愛情不足だけでなく、権威的、過保護な関わりでも子どもの精神的問題に影響し、思春期の不安やうつなどに繋がる可能性がある¹²⁾。アタッチメント関係が作れないと安心した人間関係は作れないし、親の過干渉や過保護などの不安なアタッチメント関係も、特に思春期でうつや不安の起こる原因でもある¹³⁾。助けがない感覚や孤独感が関係するからである。このように愛着をみると、親と子どもの愛情のやり取りで作られていくものである。関わる者（教師）は家族関係や環境（地域等）の背景もしっかりと見ていく必要がある。

付記

本研究は令和3年度科学研究費助成事業（課題番号：21K02327）「愛着障害と発達障害の問題行動の鑑別と支援への応用に関する研究（研究代表者：稲垣卓司）」の助成を受けて行った。

本研究の要旨は、第64回児童青年精神医学会総会2023年11月（弘前市）においてに発表した。なお本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

研究に協力いただいた児童養護施設、心理療育施設のスタッフの皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 米澤好史 (2019) : 愛着障害を抱える子どもをどう理解し、どう支援するか. 福村出版
- 2) 布施泰子 (2019) : 出産・育児を経験した日本の女性精神科医の、医師として活動するための対処行動とニーズに関する質的研究. 精神神経学雑誌. 121 (6), 457-472.
- 3) 玉岡文子、田中 究 (2018) : 精神科臨床においてアタッチメントを考える-児童期から成人期まで. ころの科学. 198号, 38-45.
- 4) 近藤清美 (2018) : 発達障害とアタッチメント. ころの科学. 198号, 56-59.
- 5) 吉田ゆり、岩本純子 (2011) : 発達障害と反応性愛着障害の鑑別の見立て. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要. 6号, 15-24.
- 6) 伊東ゆたか (2018) : 被虐待児の長期的支援および予後. 臨床精神医学. 47 (9), 1029-1035.
- 7) 永田雅子・中島卓裕 (2018) : 思春期の発達障害とアタッチメント. 教育と医学. 10, 16-23
- 8) 青木豊 (2016) : 乳幼児期のアタッチメント形成とその障害. 精神科治療学. 31 : 859-864.
- 9) Bosmans,G.,Verschueren,K.,Cuyvers 1 ,B., Minnis,H. (2020):Current Perspectives on the Management of Reactive Attachment Disorder in Early Education. Psychology Research and Behavior Management. 13, 1235-1246. doi:10. 2147/PRBM. S264148. eCollection 2020.
- 10) 林もも子 (2017) : 成人アタッチメント研究の臨床的意義. 精神療法. 43 (4), 474-478.
- 11) 山下 洋 (2018) : 思春期のアタッチメント エビデンスから臨床へ. 教育と医学. 10, 4-15.
- 12) Eun JD, Paksarian D, He JP, Merikangas KR. (2018) : Parenting style and mental disorders in a nationally representative sample of US adolescents. Soc Psychiatry Psychiatr Epi-demiol. 53 (1) : 11-20. doi : 10.1007/s00127-017-1435-4 .
- 13) Brumariu LE & Kerns KA. (2010) : Parent-child attachment and internalizing symptoms in childhood and adolescence: a review of empirical findings and future directions. De-velopment and Psychopathology 22, 177-203. doi : 10.1017/S0954579409990344